

中国考古学の諸問題(二)

三、土器

水野清一

土器の研究では、なんといつても、李濟氏の『小屯』第三本、陶器上輯(台北一九五六年刊)がでたことからはじめなければならぬ。これによつて殷代小屯期の土器は定著し、中国古代研究に一礎石を提供したことはうたがいをいれない。その戦前、戦後を通じた著者の、ながい努力には、深甚の敬意を表する。しかし、千の序数による器形の分類は、いつものことながら繁瑣だともおもう。彩陶、黒陶、白陶、紅陶、灰陶、硬陶の相差示数なるものも、また、いささか銜学的である。考古学の分類や統計は、つねに意味をみいだす手段にすぎない。それ自体には目的がない。李濟氏の方法は、いつでも、分類自体が目的になつていようにおもう。しかし、下輯がまだあらはれていない、そこにどんな議論が展開されるかも知れないから、まづはその方に大きな期待をかけよう。

鄭衡氏は、この資料を分析して小屯を前中後の三期に分類した。さらに鄭州の三期に、これをくみあはせて、殷代を六期に編成した

(「試論鄭州新發現的殷商文化遺址」考古學報、五六ノ三)。その論は、小屯の版築と水溝を一層とみて、その上下を第一層、第三層とすることからはじめ、それに応じた三文化期を推論した。版築水溝の第二層と、したの第三層とのあいだに差別のみとめがたいことは、すでに林巳奈夫氏(「殷文化の編年」考古學雜誌、四三ノ三)によつて批判されたが、しかし、小屯土器を形式的に三種にわけける可能性は、まだのこされている。ただ小屯三期と鄭州三期を、いかに関係づけるかは、なお今後の問題であらう。

小屯三期が層位的にみちびきだされなにもかかはらず、鄭州三期は層位的に厳然として存在する。だれももうたがいをさしはさむ余地はない。そのうえ、そのしたに龍山文化層がひろくひろがつていることも顯著な事実である。昨年発表された河南文化局文化工作隊第一隊の「鄭州商代遺址の発掘」(考古學報、五七ノ一)には、そのことが図表でしめされているから便利である。前期二里岡下層の口がくの字にをれた高、口のひらいた壁、ふとい大口尊、どつしりした太い篋、それに対して中期二里岡上層の口縁の垂直にさがつた高、口のつぼんだ壁、ほそい大口尊、ほそくなつた篋など、はつきり対立している。しかし、二里岡下層と上層とが、ともに尖足高、尖足甗、尖足大甗、平底甗、大口尊、丸底の甗と尊で特色づけられているのに、後期人民公園層はさういう特色がないうえに、篋は孟の形をしてをり、甗には圈台がある。どちらかといへば、二里岡下層と上層とは相ついだ文化層とおもはれるのに、二里岡上層と人民公園層とのあいだには、なお間隙ののこつていようにみえる。鄭衡氏が、このあいだに小屯前期をいれたのも、さういう点からであ

らう。

なお、鄭州の文化工作队第一隊(趙霞光「鄭州南関外商代遗址発掘簡報」考古通訊、五八ノ二)は、すでに南関外で二里岡下層のしたに、さらに第四層をみだし、これを南関外層と名づけた。甬は椎足で、甌は袋足が大きく、丈だかい。甬も椎足で、粗略、甬も流あつて尾がない。色も黒褐色で、一般にやや粗質らしい。また、第一隊(第一隊「鄭州洛達廟商代遗址試掘簡報」文物参考資料、五七ノ一〇)は、董寨で二里岡下層のしたに洛達廟層をみだし、南関外層よりも古いものと判定している。扁平足の鼎あり、円底の大尊、小壺あり、高足の豆が発達している。龍山黒陶にちかきものがあり、卜骨三片も鑽鑿ともになく、古いことがわかるという。

鄭州の発掘は、かくのごとく、殷末からさかのほつて、龍山期につづく各層をあきらかにしたが、べつに鄭州西郊十華里の碧沙岡では春秋戦国の古墓百餘墓を発掘し、高、孟、豆、罐よりなる第一群と鼎、鬲、盤、盂、杯とよりなる第三群と両者をまじへた第二群とを区別した(第一隊「鄭州碧沙岡発掘簡報」文物参考資料、五六ノ三)。それから鄭州西北郊の岡杜では、戦国秦漢の古墓四十七墓を発掘し、高、孟、豆、罐よりなる第一群、鼎、壺、敦(あるいは合碗)、盤、匜の第二群、尊、合碗の第三群、罍、盂、碗の第四群、罍、鼎、敦、壺の第五群、罍、甕の第六群に分類した(第一隊「鄭州岡杜附近古墓群発掘簡報」文物参考資料、五五ノ一〇)。このうち碧沙岡第一群、岡杜第一群が禹臯白沙墓第一群に、碧沙岡第三群、岡杜第二群が白沙墓第二群に照応することはあきらかだ、前者が春秋末戦国初、後者が戦国期にあたることは、白沙墓(陳公柔「河南禹臯白

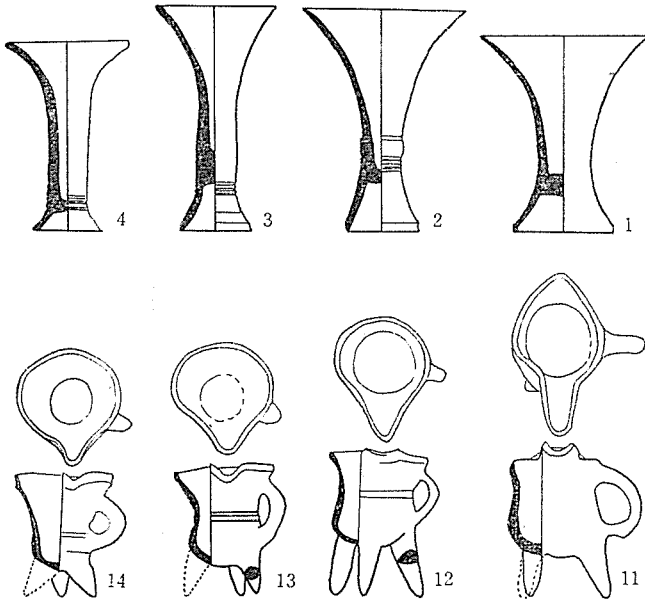
沙的戦国墓群」考古学報、第七冊、一九五四)の例からはほぼ信じられる。岡杜第六群はあきらかに後漢にはいつている。

これに関連したものでは河南洛陽姚溝と河北唐山賈各荘の例が想起される。姚溝は堅穴墓、洞室墓があるが、甬はなく、豆の盛行が特色で、戦国晩年に比定されている(王仲殊「洛陽姚溝附近的戦国墓群」考古学報、第八冊、一九五四)。黒光文様の土器、画彩の土器がある。賈各荘も甬なく、豆に変化がある、これも戦国の中期であろう(安志敏「河北省唐山市賈各荘発掘報告」(考古学報、第六冊、一九五三)。

最近、西安半坡の戦国墓一一六墓について発表(金学山「西安半坡の戦国墓群」考古学報、五七ノ三)があつたが、ほぼおなじような結果がでている。高と孟の堅穴墓である第六七墓などは古く、春秋戦国の交にさかのぼるが、ほかは洞室墓が多く、戦国でも終末までふくんでいる。ただめづらしいのは甬がおそい墓にもままみられること、姚溝や長沙のような銅器の仿製でないことである。

長沙は個々の古墓の報告も多く、考古研究所の一九五一、五二年の発掘報告(「長沙発掘報告」考古学専刊、丁種第二号、一九五七)もあり、比較的によく知られているが、土器に関しては、わりに単純である。戦国墓は後期のものが多く、ほとんど銅器をまねた鼎と敦と壺である。蓋なしの豆もあり、罐もある。前漢前期は鼎と鍾(鈔)と盒であり、後期は同様であるが、かたい印文罐や釉壺がつくられ、また屋、甕などの仮器ができた。後漢では釉陶の壺、印文の罐は形をかへながら、ますますさかんで、屋、甕、井、猪などの仮器の種類がとみに豊富になつた。

このように殷代と戦国期の資料は豊富であるにもかかわらず、西周と春秋の資料はすくない。そのうち長安普渡村東門外の二墓（石興邦「長安普渡村西周墓葬発掘記」考古学報、第八冊、一九五四）、普渡村長由墓（陝西文物管理委員会「長安普渡村西周墓的発掘」考古学報、五七ノ一）は、前者が高、甗、甗、孟形の筭よりなり、銅器か



安陽大司空村觚爵の変遷

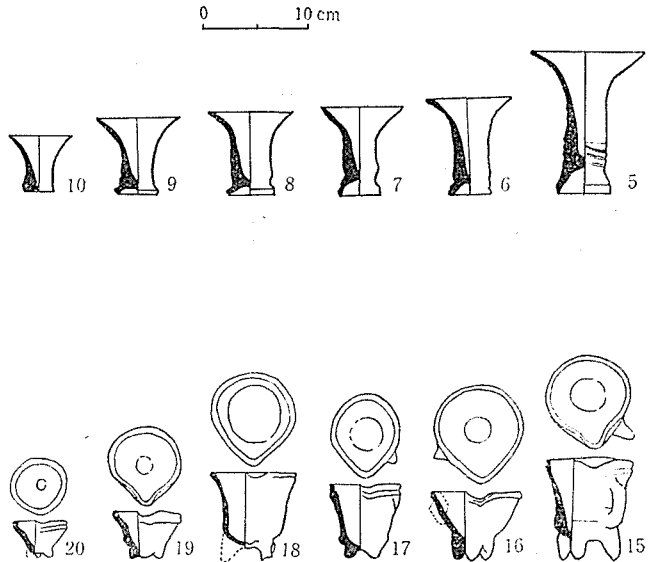
ら西周初期とおもはれるのに、後者はやはり高、甗と釉陶の豆、黒陶のごとき三脚器をふくみ、銅器から西周中期初のものとして推定される。

いま、これを洛陽東郊の、いわゆる「殷人墓」の土器（郭宝鈞、林寿晋「一九五二年秋季洛陽東郊発掘報告」考古学報、第九冊、一九五五）に比較すると、高も、筭も、甗も、すこぶるちがいが、これによつて、西周前中期の繩席文灰陶をほぼ察することができよう。

洛陽の「殷人墓」の名は、もつとも殷の伝統がつよいとみて名づけた、西周初期の墓葬である。それでも、ここにはもう爵、觚の土器はあらはれていない。それは周初だからであろうか。これに反して殷では、安陽大司空村の三百餘の小墓（馬得志等「一九五三年安陽大司空村発掘報告」考古学報、第九冊、一九五五）がしめすように、爵と觚を普遍的に副葬している。ところが、この爵と觚とが一致して、しだいに矮小化、粗略化の道をたどっているのは注意される。もし、これを前期と後期にわけるときは、爵の筭（とつて）のあるなしでわけられるし、またI、III式筭か豆の共存するとしなないことでもわけられるが、とにかく、この矮小化の進行はゆるやかでゆるみなかつたものらしい（呉汝祚「安陽大司空村の殷墓是否全属晩期」考古通訊、五八ノ三）。ただ、その共有の銅爵から判断して、これが小屯の後半であるとしても、はたしてどういふふうの小屯のものに照応するかは今後にのこされた問題である。

それにしても、西周後期から春秋前中期にかけては、まだなにもわかつていない。鄭州の工作隊第一隊にゆくと、二里岡上層と下層の土器が、むきだしのままだが対照的にならべてある。洛陽の考古

站では、あたらしい陳列ケースに仰韶期からの土器をいれ、春秋は四期、戦国も四期にわけている。北京の考古学研究所でも、この陳列ケースには仰韶期からの土器がならんでいて、春秋は二群、戦国六群、したがって計八期になる。甗のあるをもつて春秋のかぎりとしているが、いづれこの二群も春秋末のものであろう。それから長



銅鏡 1~2. I式, 3~5. II式, 6~8. III式, 9~10. IV式
銅鏡 11. I式, 12~15. II式, 16~17. III式, 18~20. IV式

沙の土器を三分して戦国二期、漢一期としている。戦国二期も、その終末の時期であろう。これらは、もろろん、試論的なもので、公表までには、まだまだ時日のかかることとおもうが、とにかく、どこでも土器の編年には、たいへんよく注意しているもので、殷、周、漢の土器が、その全貌をしめす日も、案外にちかいかいではないかと期待される。

四、古 鏡

樋 口 隆 康

たびたび繰返されているように、解放後の中国考古学は全くめざましいものがある。ただそれは出土地の明らかかな新資料の飛躍的増加という点において、とくに著しいわけで、それらの資料を基にした個々の研究は、ようやく緒についたばかりであるというのが現状である。この点は古鏡の研究についても言えることであつて、新出古鏡の数は千を以て数えうるほどであるにもかかわらず、研究活動の分野においては、あまり著しい業績がなく、むしろ資料の整備に重点をおいているようである。いま中国で出版せられてゐる諸書のうちから、古鏡に関係のあるものを取りあげてみよう。

まず概説的な論文としては、左記のものがあつる。

王士倫「談談我國古代的銅鏡」

(通訊五五の六)

王士倫「試談中國銅鏡紋飾的發展」

(文參五七の八)

沈從文「古代鏡子的藝術特徵」

(文參五七の八)